第342号　昭和48年12月10日発行（毎月10日発行）
定価一部 100円

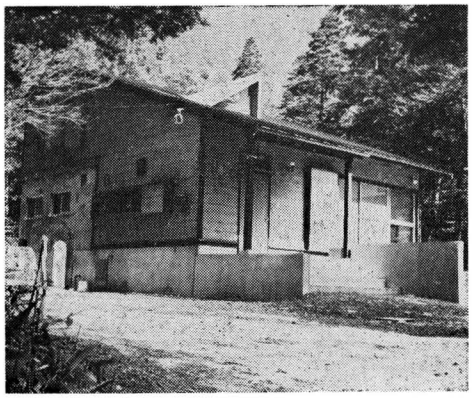
昭和48年（1973年）
12月号（No. 342）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
松方さんのこと……小野　幸… 2
イラン山岳会長，富士山へ……山本良三… 3
シェラ・クラブの人々再遊……村井米子… 3
行事予告，報告
上高地山岳研究所竣工式……山崎安治… 1
近代登山の先駆者たち…… 4
記念展開催に当って……今西錦司… 4
三人の先達……藤島敏男… 4
記念展にいよいよ開幕…近藤信行… 5
三氏記念展　目録目次…… 5
第6回山岳図書交換会報告…… 9
会員通信
カンバチエン隊より…… 6
エベレスト南壁隊より（第6,7信）… 6
支部だより
芦別岳現地小集会…… 6
北海道支部　48年度後期事業計画… 7
梓会だより……茶谷東海… 7
図書紹介
登山指導者研修会テキスト……山崎安治… 7
立山のガイドたち……山崎安治… 7
越中の百山……山崎安治… 7
会務報告
10月，11月理事会…… 7
図書室だより（48年月9）…… 8
ルーム日誌（48年9月）…… 8
山日記編集委員会よりお願い……10
新入，復活会員等……10
上高地山岳研究所建設資金応募者氏名……11

上高地山岳研究所竣工式

山崎安治

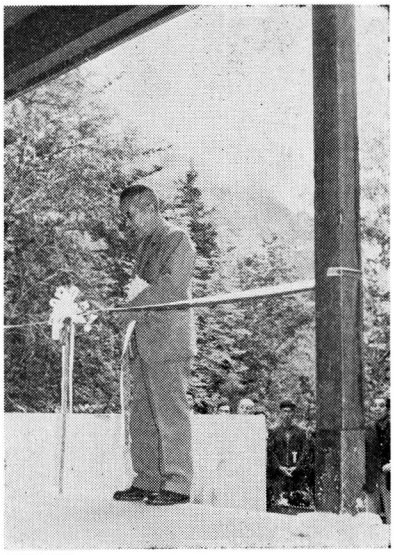


待望の日本山岳会上高地山岳研究所の竣工式が十月八日（月）午後二時から現地で行われた。その準備のため、十月五日伊倉剛三、安彦六郎、六日には三田幸夫、中屋健一、林和夫、山崎安治、藤井運平の諸会員が先行した。研究所はまだ水道工事が完成しておらず電気工事は全然未着手の状態だが、水道工事は安曇建設の作業員が最後の仕上げの最中であった。

電気はなくてもランプですみ、テレビや電気冷蔵庫などは使用できなくてもよいが、水がないのは何といっても不便きわまりなく百mばかり先の梓川までエッチラ、オッチラバケツをさげて水くみに出かけねばならなかった。しかし先発の伊倉、安彦氏らの手配によって六日は風呂も使え、先月運んで来た故安立源一郎画伯の槍ケ岳の油絵をかけたロビーのソファにくつろいで、三宅前会長持参のナポレオンや中尾副会長持参のオールドパー、ジョニ黒の口を開けた時の気分はまた格別であった。

幸か不幸か七日の日曜日は朝からドシャ降り、そのため天水が利用できたのは大助かりだったが、水道工事の作業員はずぶ濡れで水源地まで出かけていったのはいささかお気の毒であった。午後の晴れ間をみて、一行は燃えるような紅葉の中を善六沢の水源地まで散策、戻るとまた明神池まで三宅、中尾、藤井の諸氏は出かけ、伊倉、安彦、山崎はもっぱら八日の開所式の準備に大わらわの活躍をした。

当の八日は幸いにもうす曇り、小原晴子山研委員、佐藤久一朗氏も顔をみせ、信濃支部の高山忠四郎氏支部長代理蒲生明生氏や早乙女緩次氏らも到着した。



入口に紅白のテープを張り、中央に紅白のテープで大きな花飾りが器用な伊倉氏の手で作られ、正面右側のガラス戸にはJACの旗を張った簡素な会場が出来上った。

来賓として御招待したのは、安曇村役場、教育委員会、地元松本営林署、上高地駐在署、案内人組合、環境庁国立公園管理事務所、中部電力、そのほか北は燕山荘から南は乗鞍岳頂上小屋までのそれぞれの経営者の諸氏、それに報道関係者というなかなかの数であった。

定刻になっても福島安曇村々長の姿が見えず、やきもきしていたが、間もなく到着という知らせがあったので二時二十分から始めた。まず三田前会長がテープカット、中尾副会長の挨拶、林山研委員長の経過報告があって、中尾副会長より、安曇建設小西平八社長に感謝状が贈呈された。最後に福島村長のお祝の言葉と高山忠四郎氏の音頭で乾杯し式を終わった。

披露宴は西糸屋の広間でにぎやかに行なった。三々、五々また研究所に戻り、岳沢ヒュッテの岳人などを中心に祝い酒をくみかわした。

昨年の上棟式からちょうど満一年、会員のための研究所がここに完成したことは、何よりの喜びである。まだ電気工事は完成しておらず、管理人も未定なので、研究所はまたひとまず今冬は閉鎖し正式に一般会員への解放は明年五月以降になると思うが山研究員ではその間、具体的な使用規定などを新しく決めたいと考えている。

電気工事など建設資金も最初の予算よりかなりオーバーしているため、会員募金もなお一層力を入れねばならず、会員諸氏のより積極的な御協力を切に願う次第である。

（写真撮影は安彦六郎氏）

J・A・Cマーク入りの
ぐい飲みと手ぬぐい

山岳研究所の竣工式の参会者に記念品としてマーク入りのぐい食みと手ぬぐいをお配りしました。ちょっと気のきいたもので、会では一般会員の希望者にもマーク入りぐい飲みとトックリ一組千円で、またマーク入り手ぬぐいは百五十円でお頒けすることにしました。ルームで販売しておりますが数量がわずかなのでお早目にお買上げ下さい

松方さんのこと

小野　幸

「序でながら、ロータリー人種の中にも案外高所民族がいることは興味のあることだ。

第四一一地区のエル・アギラールというクラブは海抜一二、五〇〇フィートのところにあるということだ。この高さはmに換算すると大体三八〇〇mになる。富士山の頂上より少し高いのである。会員はいつも一〇人そこそこのようだが、定めし山奥の鉱山の町だろうが、どんな人達がどんな例会をやっていることだろう。言葉は通じなくても、メークアップかたがた行ってみたいところである。

しかし、楽をしたいと考えて、ヘリコプターなどで運んでもらうことは禁物だ。向うで降ろされた途端に歩けなくなるかも知れないからだ。つまり高度に順応する時間と段階とを無視してはならないので、ヒマラヤの山登りになれば、山に登ることもさることながら、如何にしてその高さに身体を馴らして行くが大問題になるのである」。

これは松方さんが、昭和四十六年「ロータリーの友」一月号に『エベレスト二題』と題してつづられた文の一部で、文中のエル・アギラールはメキシコ、メークアップは欠席の穴うめに他の地区に出席すること、したがってこの文の「会員」とはロータリークラブの会員のこと、などご気づきと思いますが付記します。なお、松方さんは東京ロータリークラブのパストガバナーという地位、したがって「友」編集者のもとめにより寄稿されたのでありましょう。

松方さんとはじめてお会いしたのは昭和十年ごろ、虎の門不二屋ビルの会の図書室でした。その頃はまだ会員にいれてもらわないで本を見せてもらいにかよっておりました。役員会があったときかも知れません。「君、よく読んでますね」と声をかけられました。この室でかりる本の多くに「松方三郎氏寄贈」と記されておるので、ずい分本も持っている方にちがいないと思っておりました。それからは、お会いしますと、本についても、いろいろおききするようになりました。その後、わたしが会の入会を認められ、幹事になった戦争末期のころは、もう日本の内地にはおられませんでした。

戦後間もなくです「小野君」といわれてよびかけた人の顔を見ましたら松方さんでした。ところは上野の「うさぎや」いう菓子屋の店先きなのです。わたしは甘党で、人に贈るものも菓子をえらぶことがありました。上野から京成電車にのりかえて毎日帰宅しますので、戦前はよく「空也もなか」をもとめましたが、焼けてからは開業していなかったので「うさぎや」や「岡埜」などに行っておったのです。この日の松方さんは奥さんのかわりに買いによられたのでしょう。「ここにメリケン粉もあづけてあるんだよ。」とも言われていました。この頃は物資不足で菓子一つ買うのにもたいへんだったのです。

その頃の虎の門のルームは焼けたままで、役員会の会場にも不自由して、焼けのこった小島烏水さんや松方さんのお宅をおかりして開いておりましたので、ちょいちょいお会いするようになりました。それに、お宅の近くに大倉集古館があり、わたしはそこの館長代理の諸岡さんという方を存じあげておりましたので、ここの伝光悦の美しい扇面屏風を見せていただきに行ったかえりにも、お宅によせていただいたりしましたが、日比谷公会堂裏の共同通信社に勤務されるようになられてからは、わたしの勤め先の丸の内からすぐですので、電話で連絡しては参上して、本の話しをうかがっておりました。いつも、いかめしい受付に面会申込みを通じてから、やっとご本人に会えるいかめしさを思い出します。

昭和二十三年でした。わたしのつとめ先が主催で松方さんに講演していただいたことがあります「君にたのまれちゃ、こまっちゃうな。」ばかりでした。わたしは「お話しの題はアジアひとめぐり、ではどうでしょうか。」と当日はこの演題をかかげましたら、松方さんは観光や自然について、じっくり話してくださいました。

「都会の金持ちや土地の山師が、自然を売り物にして一儲けしてやらうと考えたりすることは、スイスにも必ずしもなかったわけではないのであります。」

と、マッターホルン鉄道問題からユングフラウ鉄道の場合、開発の限界、よき社会の建設に及んで話してくださいました。この話しは後に「観光と自然として原稿をいただけましたので、他の講演者のものと共に数百部をプリントしましたが、菊判一五頁以上のながい内容の名文でありました。なお、さきに岩波から出された防災科学「諸災」の中につづられた『山の危険と遭難防止』四〇頁ほどの文も新しい会員のあまり気づかぬものでありましょう。

この頃、写真家の名取洋之助さんを紹介してくださいました。彼はつとめ先が、神田の岩波書店だったので、土曜日の午後、神田の古本屋をのぞくついでに面会に行ったものでしたが、おしくも先年ゆかれました。

昭和二十五年ごろだったでしょうか「小野君また本を出すかもしれないよ」でした。じゃあ『アルプスと人』のつぎですから『アルプスと本』とでもしましたか。」とじょうだんに申しましたら「本屋では『山と書物』とか言っていたが内容は山にばかりかぎらないものだから、友だちに題を懸賞募集して見ようと思うんだよ。」と申され、ノートにもぐちゃぐちゃと五つ六つ題がならんでいました。そして、やっと「遠き近き」と名づけられたのであります。「これ三千部刷ったんだけど売れるかね。」とも申されておりました。

この頃はときにはデパートの古書展におともすることもありましたが、ご自分の原稿あつめやほん訳などの方に多忙だったようです。白樺派の方々にお知りあいの多かった松方さんは、文学、絵画、民芸などにも、それぞれ特別なかかわりあいを持たれていました。そのひとつのあらわれが、岸田劉生の日記の校正や解説であったのでしょう。昭和二十七年から二十八年にかけて熱海の竜星閣から出されたその「劉生絵日記」は全三冊、内容は劉生のしるした大正十一年から十三年の三年間の日記でありますが、この他、松方さんは昭和五年の「山と雪の日記」や昭和四十八年「ロータリー美術館」の場合と同じように、じっくりこの種類のお仕事にもとり組まれていたようであります。

昭和二十九年、ジョン・ハントは少年少女のため（ヤンガーリーダーズ）に「エヴェレスト登山」（The Asent of Everest）を記しました。それをうけて松方さんは岩波少年文庫の中に「エヴェレストをめざして」として訳されました。それから、その翌年、英国エヴェレスト隊のヒラリーは「登高」（High Adventure）という本を出しました。松方さんはこれを島田巽さんと共訳で昭和三十一年「わがエヴェレスト」として朝日新聞社より出されます。なお、この本の内容の一部は昭和三十五年に筑摩書房より「世界ノンフィクション全集第三巻」におさめられました。

日本橋の丸善が新装されてからは、ここでもお会いしました。本をひやかしてから、階上の「風月堂」の喫茶室で話しをうかがったものでした。

昭和三十五、六年からはご自分の趣味の関係のお仕事もふえて、お会いする機会もすくなくなったらしく、先日やはりなくなられた会員の石井鶴三先生からのお便りを整理しておりましたら、松方さんからのお便りもぼつぼつ出てまいりました。松方さんはお便りの文のおわりには松方三郎と記さず、いつも㊀のサインが見られました。

昭和三十八年、岩波書店の月刊誌、「図書」に『随筆登山入門』というサブタイトルの文を連載されました。そのことをわたしが、はがきで申したのでしょう、その時のおはがきに、

「図書は8月号で一段落、書足して本にしろといわれているのですが、そううまく行くか知ら？」

とあります。ひとごとのように「うまく行くか知ら？」

と岩波書店に話しかけているのでしょうか、ご自分の気持ではそれほどのり気ではないよ、といわれているような心あたたまるお便りですね。それからお便りの文句の疑問文で終るときはそのつぎに？の記号をつけられていることに気がつきました。「ありませんか？」とか「でしょうか？」とあります。

この頃から松方さんは、ご自分の戦前に出された「アルプス記」が古書展に出たら知らせてほしい、といわれていたので、出るとお電話申しあげていました。

昭和四十三年、おすまいの霊南坂の坂の記事が何かの雑誌にのったので、その記事をお送りしたご返事。

「切抜ありがとう。今日総会で会えるかと思っていたが、見えなかったのでお礼をあらためて書く次第です。その後、霊南坂は全部消えました。小生も御覧のような住居表示になりました。㊂」

として、港区六本木一の一〇—一八とあります。いつもでしたら住所氏名の三行かこいのスタンプをおされるのですが、まだその印がつくられてなかったのでありましょう。

エヴェレストから帰られてからは、ほとんどお会いする機会がありませんでした。お住所も世田谷区にうつられわたしは千葉県なのでいよいよ場所がはなされておりました。

お病気になられてからも、一時はよくなられ、毎週土、日に帰宅されるようになられてからはよくお電話で話しました。その他は、民芸協会の親しい編集の方に松方さんの病状をおききするぐらいでした。松方さんはこの日本民芸協会にも深く関係されておられました。

昭和四十六年の六月下旬の土曜、上野松坂屋で松方さんにお会いしました。わたしどもはこの松坂屋の依頼で毎年、夏山相談所を開いておりますがそこへわざわざおたづねくだされたのでした。ひさしぶりに一時間ほど、閉店のベルが何度もなってまで、店内でダベっておられました。相談所のメンバーには顔みしりが多かったことと、日本山岳会員も数名おりましたのでご紹介申したりしたのでした。おききすれば、この日、からだの調子がよいので、上野で二つほど会合があるので出てきたが時間が早いのでよったと申されておりました。松方さんはわたしと店を出てからも上野公園の山下まで話しながら歩き、ここでも小半時ほど立話しをしてからお別れいたしました。この日が松方さんにお会いできた最後でありました。（四八・一〇・一四）

イラン山岳会長、富士山へ

世界地図学会（三年毎に開かれ、前回はテヘラン）出席のため来日中のイラン山岳会長のM・サデギアン中将（技術担当陸軍次官兼国土地理院総裁）夫妻は十月十二日静かな秋の富士登山を楽しまれた。

しかし相憎の天候で頂上部が一瞬チラリと見えた程度で視界はきかなかったが、六十二才の中将はよく頑張られて七合目（小屋の表示は二九〇〇m）まで登られた。奥さんは登山の用意がなかったので、五合目付近を散策された。

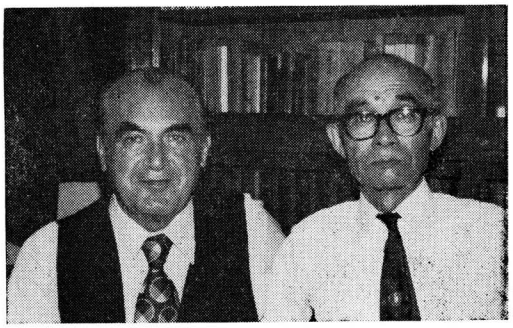
同行者は吉沢一郎、山本良三、影山淳（名古屋山岳会、アラム・クーの北壁で七十m落ちて怪我をした時、色々世話になった）の三人。

なお、イランでは食事を朝昼の二回しかとらず、なお昼食に時間をかけてたっぷりカロリーを吸収する習慣らしい。夕食は果物程度なので、われわれとは調子が合わず、持っていった用意の握り飯（ライス・ボール）も奥さんには人気がなかった。

翌十三日（土）には吉沢氏の案内でJACのルームに来られたが、丁度古本市と土曜会があったので、多数の会員と交歓することが出来た。

追って、日本山岳協会では二十四日夕刻、同中将を招いてパーティを開き歓迎の意を表した。なお、加藤幸彦氏らの案内で諏訪を訪れ、霧ケ峰付近、長野ではそこの吉沢氏らの肝入りで戸隠神社までの散策をされた。これらは天気がよくて、北アルプス、南アルプス、富士山、八ケ岳などの眺めを満喫し、充分満足されたようである。

（山本良三）



左・M・サデギアン会長、右・吉沢一郎氏

シィェラ・クラブの人々再遊

村井米子

この秋、また米国のシィェラ・クラブの会員二十六名が、クラウド・ルック氏に率いられて日本各地を訪れた。去る一九六九年夏から秋へかけて一八〇名の会員が来遊、各支部の皆さんのお案内をうけて、各地の山を訪ねたことは、御記憶の方も多いだろう。

大部分はその時も来られた会員で、今年は見残した国立公園めぐりが主となり、松島、陸中海岸、網張温泉から南八幡平、月山、羽黒山、信濃大町から黒四ダム、天竜峡、伊勢、紀州勝浦、五条、和歌山、小松島、鳴戸、高松、今治、宮島、松江、大山、京都、高山……天候にも依り山は少なかった。

東京から天竜峡までは佐々保雄氏夫妻がついて案内され、大山登山の際には、東京から錦織保清、堀川英司郎、関口周也の各会員が参加した。国立公園協会千家理事長の好意により、各国立公園地内ではレインジャーと自然保護に関する意見の交換ができて有意義だった。大山登山には殊に担当の加藤穣二氏がつきそい、お世話になったのを喜んでいた。

来遊すぐの九月一日と、出発前日の三十日に私も東京で、再会のルック氏夫妻はじめ皆さんに逢ったが、会員の中には前回のときの誰彼をなつかしむ声もあった。今年は日本山岳会へ公式の依頼というわけでなかったので皆さんへ御連絡がとれなかったが、明年は四グループ一二〇名が来遊の予定である。七、八月に、四週間と六週間の二グループ、九、十月にも同様という。今年は下見もかねていたので、コースは大体似たものになろう。（詳細は関口周也氏にお問合せを）

自然保護の先進国、国立公園の百年祭も去年行われたアメリカの、ことに熱心なシィェラ・クラブの人々と、各地のJAC会員が語り合う機会をもつことができれば、まことに意義があると思われる。

去る八月二十五日、穂高岳山荘五十周年祝に登ってきた私は、その新築の部屋から便所などヒノキの香高いのに感嘆したが、だんだん失われる純日本的な山や田園の気分を味わせたいものである。

それにしても、シィェラ・クラブの予算の大きさや、会員の層の厚さを聞くと、二十年来自然保護運動にきゅうきゅういってきたものには、羨しいかぎりである。わが国の現状が寒む寒むと感ぜられる。

原稿募集

本会報の原稿を募集します。初めての方も、新入会の方も、ふるって投稿下さい。

内容　内容は紀行文でも山に関する研究でも、あるいは感想でも随筆でも結構ですが、日本山岳会の「会報」であることをお忘れないようにお願いします。記名に限ります。

長さ　長さも自由ですが、紙面の関係もあり、なるべく一頁以内に収まるようにお願いします。会報一頁は一行十七字で二百行です。できる限り一行十七字でお書き下されば幸いです。

稿料等は、会報の性質上、差上げられません。

近代登山の先駆者たち

小島烏水 木暮理太郎 岡野金次郎 生誕百年記念展

会場 十二月二十四日～二十九日
場所 日本橋・丸善（三階）
主催 日本山岳会・丸善

記念展開催にあたって

今西錦司

日本山岳会は明治三十八年の創立以来、六十八年の歴史を数うるにいたりました。山岳を愛好する会員諸氏の熱意により、研究、実践、指導、調査などにわたる多方面の活動をつづけて今日にいたったわけでありますが、本年は日本山岳会の大先達ともいうべき小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎三氏の生誕百年にあたりますので、その偉大な業績をしのび「近代登山の先駆者たち」の名のもとに、記念展を開催することにいたしました。

小島烏水氏は本会創立の中心的な存在であったばかりでなく、日本アルプスの探検時代に先駆的な業績をのこされ、山と芸術のすぐれた研究者でありまして近代における山の文学の創始者でありました。また初期において、小島氏のよき同行者であった岡野金次郎氏は、ウェストン師の発見をとおして、いわば本会成立の起動点を明確にされた功績ある方であります。木暮理太郎氏は日本の伝統的な文化を肌身につけつつ山に熱情をそそがれた巨人的な存在であり、とくに晩年のヒマラヤ研究は、わが国における嚆矢であるばかりでなく、われわれ後輩に多大の感化をおよぼしているのであります。同氏の精神が戦後のマナスル登頂、エヴェレスト登頂に、そのままつながるものといっても過言ではありますまい。

本記念展を開催するにあたって、主催者の願うところは、これら三人の大先達のかがやかしい登山ならびに文化的活動のあとをふりかえってその業績をしのぶとともに、日本人と山岳とのふかいつながりを文化史的な展望のなかでいま一度考えていただくことにほかなりません。それはとりもなおさずわれらの美しい国土と自然を、守ることに通ずるとおもうからであります。

日本山岳会創立三十周年記念として昭和十年におこなわれた「山岳図書展覧会」以来、本会とゆかりのある日本橋・丸善においてこの記念展がひらかれることは、まことによろこばしいことと存じます。丸善株式会社の共催参加にあつく感謝いたします。

三人の先達

藤島敏男

明治の末から大正のはじめ、青年期を迎えたものが、なんとなく山に惹かれ山に登りはじめた頃は、山岳部はもとより旅行部というようなもののある学校は、きわめて稀であった。日本山岳会の存在を知り、年若くして会員となったものとあるが、日本山岳会は駆出しの弱冠には近より難いものとあきらめ、会誌「山岳」の発行を待兼ねては、神田・東京堂の店頭（たしかこの頃は東京堂書店だけが発売所になっていたようにおもう）に求めにいったものだ。

『山岳』は当時の若者たちにとって唯一の経典であり、それによって彼等は山への眼をひらかれ新らしい境地のあることを教えられ、日本山岳会は山登りの総本山と考えられていたのだ。その日本山岳会の創立に当って、最も大きな役割を果されたのが、小島烏水その人である。創立発起人として名を連ねた諸先輩、あるいはその仲間であった多くの先輩たちを等閑視するわけではないが、小島先輩には若くして既に名を成した文筆家という強みがあった。

大正四年七月（一九一五年）米国に渡る直前に完結した『日本アルプス』第四巻までに、上梓された著書は瞠目に値いする数である。小島さんの滞米は十三年の長きに亘ったので、後継者に与えた大きな影響はその数多い著作によるところが多いといえるであろう。

「それは素晴らしい山の夜明けにもたとえ得べく、世人の心を捉えたのである。私は今日でも『日本アルプス』を始めて繙いたときの興奮を忘れることが出来ない」と槇有恒氏の文にあるが（烏水記念号2頁）おなじような感激を味ったものは当時の若者の中に少くなかった。

日本の近代に於ける登山に最も大きな影響を与えた先輩は、小島烏水と木暮理太郎のふたりであろう。前者が山岳会創立当時の中心であったこと、日本アルプス探検時代の耀かしい業績、等身近い著作群と続いて、ご本人はそんな積りはなくても、ほかからみれば先ず華やかともいえるものがあった。

木暮先輩の方は創期の『山岳』を手にして世の中には仲々山好きがいるものだ位に考へ、独自の山あるきに没頭、山岳会への入会は創立後九年目というのだから、一筋縄ではいかない先輩である。無類の山好き、晩年までつづいた闘志は諸先輩の中でも群を抜いていた。それでいて武田博士のいう〝鐘馗髭〟がいかめしい偉丈夫〟にも似合わず温厚な大人であった。入会後いくばくもなく会の大立物となり、『山岳』の編集を長年に亘って担当されたばかりでなく、学校山岳部や他の登山団体の講演会などに、「講演は嫌いだよ」と言いながらもよく引張り出されて、話をされた。話振りは巧みというよりもむしろ熱っぽいもので、その風貌からもいかにも山男の権化といったふうであった。

長い登山歴、広い足跡にもかかわらず、著書としては還暦もすぎてからの『山の憶い出』上下二巻、それも周囲からヤイノヤイノと攻め立てられての上梓が、唯一のものというのだから、小島先輩とちがって筆の人というには程遠い。しかしその山登りの対象は高山大岳籔山低山を問わず、晩年には中央アジアヒマラヤに興味を抱き、かのシュラギントワイトの大著を座右におくといった熱の上げようだった木暮先輩の、わが登山界での大先達としての地位は揺がないものであろう。

岡野金次郎先輩が、小島、木暮の両氏と肩をならべてここに登場されるのは、外でもない。岡野、小島両青年徴兵検査場での出会い、交友関係の始まり、近郊の遠足から丹沢山への登山、ふたりで乗鞍岳登山、槍ケ岳の初見参から登頂、ウェストン師の著書の初見、ウェストン師と岡野、小島両氏の初めての面識、ウェストン師からの山岳会創立のすすめ、ウェストン師帰英後アルパイン・クラブからの来翰、日本山岳会の設立という経過成行は、小島武田、高野、岡野（烏水記念号四十九頁以下）の諸氏がいろいろな機会に記るされているのでここに詳述の要はあるまい。

まったくの偶然ではある事が、岡野さんという人がおられなかった、山岳会創立の面々とウェストン師との出会う機会もなく、創立のすすめもA・Cからのはげましもなく、いつかは日本に山好きの集る会が誕生したにしても、その時期が何年かあとになったかも知れないとおもわれる。明治から大

正にかけて「登山の気風を作興する」に大きな役割を果した日本山岳会の設立が、何年かおくれたとすれば、近代登山の普及進歩もそれだけ先きへ延びたかも知れないのである。こんなことを考えると岡野金次郎氏の存在は、日本山岳会にとっても、日本の登山界にとっても銘記しておくべきであろう。ご本人は勿論日本山岳会々員であったが、数年ならずして退会された。その理由が「私の名が少しづつ知られるようになって、新聞や雑誌の座談会に時々呼れるようになり、…中略…有名になり名士扱いされることは私の最も嫌いなことであり、私にとってそれは回避し予防しなければならない危険であった」（記念号六〇頁というのは、近頃の人には恐らく不可解であろう。会を去っても好きな山登りは続けられ、小島木暮両先輩よりも遥かに長命であった。

山登りは先人の肩にのって、先きへ上へ進むものだと誰か書いていた最先端をゆく登山者達も、時には過去を振り返へる心を持ってほしい。

（一九七三年十月十九日記）

記念展 いよいよ開幕

近藤信行

六月以来、藤島敏男委員長を中心に着々と準備をつみかさねてきた≪近代登山の先駆者たち≫展は、いよいよ十二月二十四日から、日本橋・丸善でひらかれることになった。

先号の会報で報告したように、三氏ならびに初期山岳会関係資料の蒐集から仕事をはじめたが、多くの会員諸氏から出品協力の御返事をいただくことができた。さらに委員会メンバーによって資料探索がおこなわれ、藤島敏男氏が『週刊新潮』掲示板に記事を出すなどの試みもなされた。また三氏の御遺族からはそれぞれに積極的な協力をいただいて、貴重な未発表資料をお借りすることができた。このように資料蒐集の努力がつみかさねられて、展示内容の全容がわかってきたのは、十一月初旬のことであった。山崎安治が酒盃を傾けながら委員会の雰囲気をもりたてたのも、神原忠夫、野上成勇が太田市に木暮理太郎氏の生家を訪ねて調査にあたったのも、鈴木実が展示に品質管理ならびに撮影のかたわら木曾上松に石田吟松氏を訪ねたのも、また近藤信行が再度にわたって上田市の滝沢家を訪ねて門外不出の烏水書簡六十通を借用したのも、この間の出来事であった。もっと時間をかけられればとおもいながついに大詰めにきてしまったわけである。おもえばみな六ヵ月という長いような、短いような、奇妙な時間を体験したことになる。目下、野上成勇を中心に展示場設営についての具体的な検討がなされ、十二月二十二日搬入を目標に、最後の仕上げにとりくんでいる。

いずれ記念展目録で発表されることになるが、展示品の主要なものをあげると、つぎのとおりである。

〔小島烏水関係〕全著作（異版・特製本・署名本をふくむ）。編著・序文・執筆雑誌など。原稿（『日本アルプス』の一部。上河内地名考。疑問の槍ケ岳日記。その頃の思い出―日本北アルプスの南角。すたれ行く富士の古道、ほか）滝沢秋暁あて書簡六十通（明治二十九年から昭和二十二年まで）横瀬夜雨、中村清太郎、武田久吉、藤島敏男、島田巽あて書簡。烏水あて高頭仁兵衛、横瀬夜雨書簡。烏水あてウェストン書簡。烏水レリーフ。中村清太郎茨木猪之吉。大下藤次郎、丸山晩霞らの絵画（烏水旧蔵ほか）蔵書票。写真その他。

〔木暮理太郎関係〕全著作（特製・署名本をふくむ）肉筆稿本「鶏肋「支那星図稿」その他。絵葉書アルバム（諸家の来信多数）寄稿雑誌（『ハガキ文学』『霧の旅』他）自訂本「中央亜細亜の山と人」。筆蹟・書簡。茨木猪之吉デッサン。肉筆展望図「東京から見える山」。扇面。『東京市史稿』および複製江戸図。写真・遺品その他。

〔岡野金次郎関係〕日記帖（全二十冊。大正十二年～昭和三十三年、逝去の日まで遺墨・英文筆蹟。肖像画。愛蔵画（北斎筆）。遺品。金次郎あて小島烏水、高頭仁兵衛書簡。その他。

なおこの記念展開催にあたって、委員会ではつぎの三点の刊行物を企画、完成することができた。

≪記念展目録≫ この記念展はたんに回顧の域にとどめず、文化史的な視点から日本人と山岳とのふかいつながりを考えよう、というところから出発したが、編集にあたって執筆者にそのような意図から原稿をお書きいただいた。あわせて小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎三氏の未発表原稿、未発表書簡未発表日記などを掲載し、解説をそえた。

≪『山岳』第四十四年第一号≫覆刻版 烏水歿後、田辺主計、島田巽、関根吉郎、望月達夫氏によって編集されたこの一巻は、≪小島烏水記念号≫として刊行された。烏水の多彩な業績とその全体像にせまろうとしたもので、今日でもなお資料的な価値は高い。会員諸氏から本書をもとめたいとの声は多く、また古書価八千円以上の高値をよんでいるところから、覆刻刊行は会員の期待にこたえうるものとおもう。

≪『霧の旅』木暮先生追悼号≫ 理太郎歿後、その薫陶をうけた霧の旅会会員によって刊行された。理太郎の遺稿・写真（紙焼きのまま貼布）のほか追憶その他を収載『霧の旅』は会員だけに配布された機関誌であったから、部数はきわめてすくなく古書店に出ることはほとんどない。稀本中の稀本といえるかもしれない。

右のような経過をへて三氏記念展の準備がととのったわけですが、会員諸氏多数の来場をお待ちする次第です。またこの企画にたいする感想を会報『山』にお寄せいただけましたら幸甚と存じます。この記念展のために御協力くださった方々に厚く御礼申し上げます。

≪近代登山の先駆者たち≫ 三氏記念展目録 目次

・記念展開催にあたって　今西錦司
・三人の先達　藤島敏男
・初期山岳会の人々　三枝守博
・ウェストン書簡と先駆者たち　織内信彦
・登山史における三岳人の位置　山崎安治
・山に向う心―日本人と山　串田孫一
・日本文化と山の歴史　色川大吉
・つながりということ　松永敏郎
・『山岳』編集者として　烏水・理太郎　望月達夫
・珍らしい英語の序文　吉沢一郎
・書斎の岳人たち　島田巽
・木暮先生と霧の旅会　山崎金次郎
・木暮先生御夫妻の晩年　野口末延
・兄・小島久太の思い出　小島栄
・山王台交遊録から　小島隼太郎
・父のこと　木暮美枝子
・父岡野金次郎　岡野敬次郎
≪資料≫
・その頃の思い出―日本北アルプスの南角　小島烏水
・山の便り　小島烏水
・「鶏肋」より―赤城山紀行・花崗岩の山水　木暮理太郎
・一ノ倉懐古　木暮理太郎
・日記抄　岡野金次郎
≪資料紹介≫
・烏水書簡六十通　近藤信行
・「鶏肋」と「支那星図稿」　神原忠夫
・岡野金次郎日記　石川次郎
・主要出品目録
・三氏略年譜

A5判九十六ページ アート紙使用 写真多数入 頒価未定

この目録は記念展会期中、丸善にて発売。十二月十五日よりルームにて三百部にかぎり発売。

『山岳』第四十四年第一号

小島烏水記念号（覆刻版）内容

・登山史上の人としての小島さん　槇有恒
・日本山岳会の創立と小島烏水君　武田久吉
・日本山岳会創立頃の小島さんと私　高野鷹蔵
・日本の山と烏水　中村清太郎
・小島と私　岡野金次郎
・小島さんのアメリカでの登山　東良三
・烏水と「文庫」　河井酔茗
・浮世絵研究家としての烏水先生　藤懸静也
・小島烏水と日本アルプスの水河地形　辻村太郎
・烏翁の著書を飾る諸作　斎藤昌三
・後輩の立場から見た小島さん　松方三郎
・父を語る　小島隼太郎
・烏水・小島久太年譜　中村清太郎

・烏水・小島久太著作目録並解題　藤島敏男・田辺主計
・小島烏水記念展覧会の記　島田　巽

頒価二〇〇〇円　荷造送料二〇〇円

『霧の旅』五十四号（木暮先生追悼）

内容

・絶筆・信甲旅行日記　木暮理太郎
・和歌　木暮理太郎
・木暮先生と東京市史編纂事業　鷹見安二郎
・木暮君の想い出　田部重治
・想い出の山旅　武田久吉
・詩　山を描く木暮先生　尾崎喜八
・手記を遺された木暮先生　荒井道太郎
・一方を向いている山の人々　村尾　亮
・先生と私　小池新二
・木暮先生を想ふ　鶴岡元之助
・木暮先生の追想　吹原不二雄
・思ひ出　柴山登茂次
先生と私　野口末延
悼木暮先生　石川孟範
先生に捧ぐ　神谷　恭
稿に代えて　河田　楨

B5判変型　袋とじ　一八二ページ
頒価二五〇〇円　荷造送料二〇〇円

右の三点はルームにて発売中。少部数作成につきお早目にお申込み下さい。

『山岳』覆刻版シリーズ
好評発売中！

・第一年第一号（再版）
・第一年第三号
・第二年第一号
・第二年第二号
・第二年第三号

各号とも取揃えルームにて発売しております。頒価二〇〇〇円　荷造／送料二〇〇円

会員通信　海外

カンバチェン隊より

前略出発前はゆっくり話す時間もなく残念に思っております。

ネパールのダウンより一七日間キャラバンをつづけ、ここBC（四七〇〇m）に九月四日到着しました。今回の隊は、前回のバルンの時より大部隊でキャラバンでは毎日二五〇名のクリーを雇い、ここBCではシェルパを合わせて三〇名の人間が生活しております。

すでにCⅡまで建設され昨日全員が休息のためここBCに下りて来ました。登頂は十月上旬頃かと思いますが未だモンスーンが明けず雨や雪が降っております。

RCCのエベレスト隊のニュースも時々伝わって来ます。

会の仕事も中途でぬけて申し訳けありませんが諸兄によろしくお伝え下さい。

9／15　雨の降るカンバチェン
BCにて　（大倉昌身）

エベレスト南壁隊より（第六信）

いつの間にやら十月に入り、第一週もすぎました。私達の登山も、いよいよ大詰に近づいております。九月後半は比較的悪天が続き、上部とアイスフォールでの行動は、幾分制限されましたが、二十七日には七、五〇〇m地点に第四キャンプを建設。ここはJAC隊のC4地点と全く同じで、テント台等もそのまま利用できました。日中は上部からの氷や岩のかけらに、ひっきりなしに見舞われる、快適とはいいがたい場所ですが、このC4建設によってようやく一つの目途がついた感じで九月三十日には、石黒隊員らにより、第五キャンプ予定地、七、九五〇mまでルート工作が完了いたしました。C4―C5間のルートのコンディションは堅雪で、まず最高ということがいえましょう。

十月一日～四日の間は、再び風雪となり、隊としては、アイスフォール工作開始以来、はじめて上から下まで完全な停滞を余儀なくされました。逆にいえば、これまでの天候が良すぎたということでありますが、ともかく南から吹く風と湿雪とで、モンスーン明け未だしの感を受けました。もっとも、気温ははじめのころに比べるとかなり下り、日中、好天時のウェスタンクウムでも、それほど暑さを感じなくなってはおります。

天候の好転した十月五日から、C5地点への荷上げが開始され、C5建設は十月七日。この日深田隊員らがC5入りいたしました。現在のところルートの伸びに荷上げがようやくおいついているという感じで、あらためてヒマラヤの大きな山での補給の困難さをかみしめております。大部分の隊員、シェルパとも、相変らず、コンディションが良好なので、何とかやっていけるということでしょう。

ここ数日中には、第六キャンプ予定地まで、ルートがのばせることと思います。そこから先が、いよいよ未知の部分になるわけですが、後、約二週間から長くとも二十日間、の残された期間、精一杯がんばりたいと考えております。

末筆ながら、松方さんの亡くなられたことをB・Cでうかがいました。隊員一同、謹んで、御冥福をお祈り申し上げたいと存じます。私としても前回のエベレスト遠征の隊長の訃報を再び訪れた当地できくのは、感無量としか申し上げようがありません。

それでは、また。

十月八日　アドバンス・ベースにて
（鹿野勝彦）

同（第七信）

今回は、大変残念なシェルパの雪崩による遭難のことからお報せしなければなりません。

エベレスト周辺では、十月九日より再び天候が悪化、六、七〇〇mのABC周辺でも烈風でテントの維持が困難なほどの状態となり、降雪とあいまって最悪の条件となりました。ようやく建設したC5、C4も次々放棄せざるをえない状況になり、C3（軍艦岩）も補給がとだえて、維持が困難となったわけです。そこで風がいくぶん弱まった十二日、ABCからC3への補給を強行したわけですが、ABCから三十分も行ない地点で先行していたシェルパ七名が表層雪崩にまきこまれうち四名が埋没しました。現場の残り三名と、ABCで出発する所だった隊員二名、シェルパ三名がただちに発掘を行い、三名までは救出できましたがザンブー一名はついに救出できませんでした。

ザンブーといえばJAC隊にも参加した大柄で明るい性格のシェルパで、記憶されている方も多いと思います。若いけれど、技術、体力とも抜群で、今回も常にトップグループと共に行動しておりました。それが、私達の焦りと判断の誤りからほんのABCから数百メートルの地点で、雪の下に埋っております。現場から風雪の中におぼろにABCのテント群が見えるほどの位置で雪をかきまわしながら、私としては、本当に泣くにも泣けない気持でした。十四日から、天候がようやく回復し、付近一帯のゾンディーレンなど行いましたが、五日間の悪天で斜面の様相が変ってしまい、全く手がかりもないまま、十五日には全員の捜索を打ちきりということになりました。

ABCでは、最低気温がマイナス二十五℃前後まで下り、この三日ほどは雲一つない天候です。ただ、ここをとりかこむ稜線、そして八、〇〇〇mラインから上では終止どうごうという風の音が絶えず南壁上部やローツェフェース上部では夜目にも白く雪煙が走るのがわかります。

当面、南壁はC4、C5への荷上げとキャンプの再建。一方、ローツェフェースからサウスコルへはサポート隊の行動と残されたわずかの日数で、最大限の活動を行いたいと思っております。

あらためて、ヒマラヤの恐しさをしらされた今、再開された登山活動の中で、私なりにがんばりたいと思っております。それではまた。

十月十六日　ABCにて
（鹿野勝彦）

支部だより

芦別岳現地小集会
北海道支部

九月二十九日、夕刻、根室本線山部駅に集り、近くの古い木造建の公民館と消防署の寄合所帯の二階広間に案内される。地元会員の顔ぎきで特別の宿泊である。十九時過ぎに出張途次の方や自家用車でかけつけ顔が揃う。根岸会員自慢の手作り料理を称讃し懇親の夕餉が始まる。富良野市長から贈られた地酒に意を強くし宴たけなわとなる。山部山岳クラブ会長の日野政史氏が加わり有意義なお話しを伺う。芦別岳は遭難の多い山で、遭難の都度この公民館が遭難対策本部となり、多忙を極めるそうである。

東京からはるばるやってこられた川

崎精雄氏は、小林年、石崎貞子両会員と共にウペペサンケ山に登り、その後単身で愛山渓から比布岳に登り、十勝岳温泉から富良野岳、上ホロカメットク山をやってのけてからの途次で、登られた山をひとつひとつ感銘深く語っておられた。

六月に十勝岳で行なわれた現地支部長会議の8ミリとスライドが映写され、今西会長の山頂での万才三唱や野点の場面が再現され、参加者をわき立たせる。今回の催しはその折々と苦労願ったお嬢さん達や地元有志を加えて慰労の宴でもある。

明けて三〇日、芦別岳登山組は八時に出発し、呻吟坂で難渋し、休み休み山ぶどうを採りながら登り、今さかりの紅葉を賞しユーフレ沢をへだてて岩峰を眺め入る。雲峰山、芦別岳頂上は雲の中で次第にピッチがあがり、十三時近くには頂上に達していた。

味覚のきのこ狩り組は、栗拾いに終始し、会員佐藤氏の畠でメロンを採りイモを堀るなど終日楽しい想いであった。帰路は全員のザックいっぱいにイモ、ナシ、クリなど重たげに背負い十七時解散となる。お世話になった伊藤、根岸、佐藤会員と地元の諸氏にお礼を申します。

（高沢記）

参加者 伊藤寿雄、根岸祥一、福沢義晴、川崎精雄、高沢光雄、日野政史、山川力、浅利欣吉、佐藤静夫、新妻徹、萩谷三枝子、柳田涼子、佐藤笑子、平野明。

北海道支部

昭和四八年度後期事業計画

芦別岳登山会　九月二九・三〇日
小集会　札幌・日赤会館　十一月七日
新年会　札幌・日赤会館　一月十九日
総　会　札幌・日赤会館　四月十九日
昭和四八・四九年度　幹事
支部長　伊藤秀五郎
幹事　新妻徹、平野明、浅利欣吉
萩千賀、安田成男、高沢光雄
会計監査　可知邦成、一原有徳

梓会だより

茶谷東海

昭和四十八年度の梓会の主要事項を報告する。

一、**紺野会長の長逝**

去る三月二十六日紺野逸弥会長（元海軍経理学校長）は病気のため急逝せられた。毎回ハイキングに参加しては即興詩を朗吟して全会員に親まれたよき親父の名物会長であった。ご冥福を祈る。

二、**会長の互選**

去る四月十五日顔振峠平九郎茶屋における総会で次の通り互選した。

㈠会長　**等松農夫蔵**（梓会創立会員・前公認会計士協会長・任期二年）

㈡副会長　新井克己（海経出身）、浦野寿一郎（一般男子代表）、近藤衣重（女子代表）、（各任期三年）

三、**春のハイキング**

去る四月十五日（日）、男子二十二名、女性五名、四才以下の幼年四名計三十一名で小雨の中を吾野より**顔振峠**（五〇〇米）に登る。一時間で峠の平九郎茶屋に着き午食。雨が止まないので一番楽な高山不動への車道を歩く。一時間後不動着。不動さんは年一度のお祭とあって中々の賑やかさである。帰りは参拝用無料バスで吾野へ下りる。一名無断分離行動をとったのは遺憾である。

四、**秋のハイキング**

去る十月七日（日）男子十四名、女性六名、幼児一名計二十一名で小雨の中を**石老山**（六九四米）に登る。一〇・二〇三ケ木行バスで相模湖駅を発ち石老山入口で下車。顕鏡寺までの三十分は楽だが、その直後の三十分は急坂で一汗かく。やがて雨は止んだが霧が深くて展望はない。然し萩や苅萱や女郎花などの咲く高原の気持は何とも言えぬ。一二・三〇頂上着、午食。帰りは大明神（と言っても祠も何もない）までは滑り易い道を下ったり登ったりで面白くないがその後は急降で楽。一五・〇〇鼠（ねん）坂に着き、サービスのマイクロバスで弁天島の天下茶屋に向う。今日歩いたコースの大部分は**東海道自然歩道**であった。懇親会のビールの味はまた格別。恒例の賑やかな自己紹介の後、来年八月四日（日）水交会で田部元会長、紺野前会長の追悼会を開催することを決定する。防大ワンダーフォーゲル部より長谷川部長、山田コーチ、栗崎学生が、また防大山岳会より朝井会長、田代会員が参加したことを特記したい。

五、**その他のハイキング**

有志小グループで次の山々を登り、そのコース、時間を懇親会席上報告した。

剣山（ケーブル利用）
出羽三山（羽黒山→月山→湯殿山）
雲取山（三条の湯→鴨沢）
伊吹山（バス利用）
磐梯山（中ノ湯→押立）

図書紹介

登山指導者研修会テキスト

文部省編

立山山麓の千寿ケ原に文部省の登山研修所が設けられたのは、昭和四十二年のことであるが、各受講者対象のテキストは、これまで、ざんてい的なものきりなかった。それらを全て再検討し、今日文部省テキストの決定版として発行されたのが本書である。執筆者はそれぞれの専門家が当っており主な内容は次の通りである。

一、登山の基本的問題、二、自然科学的な基礎、三、登山計画、四、登山技術、五、通信、連絡、六、装備・食糧、七、遭難対策、八、資料

文部省編だけに内容もきわめて充実しており、たんに登山研修所の受講者だけでなく、一般登山者にもテキストとして大いに利用してほしいというのが主旨、そのため一般にも販売している。

昭和四十八年八月、東洋館出版社発行、二六二ページ、定価七〇四円

立山とガイドたち

北日本新聞社編

本書は越中人の記録シリーズの一として、昭和四十七年七月から十二月まで北日本新聞夕刊に連載された「立山ガイド近代登山を支えた男たち」を一本にまとめたものである。

第一章立山ガイドの素顔から始まり信仰登山と裏方たち、近代登山の夜明け、開拓期の案内人の群像、芦峅ガイドの黄金時代など八章にわけてそれぞれ有名、無名の立山ガイドに鋭いメスを入れている。

これまで、文献のみによる立山ガイドの紹介はあったが、山を熟知している記者が、小まめに足で歩いてくわしく立山ガイドの性格、生い立ちなどが記録されたことは、日本の近代登山史の資料の面からみても、その価値はきわめて大きい。また従来知られていないエピソードもいたるところに折り込まれており、登山史に関心を有する人に是非一読をすすめたい。

付録の立山、剣岳ガイド名簿も参考になる。

昭和四十八年七月北日本新聞社出版部発行、三二五ページ。定価八八〇円

越中の百山

富山県教職員山岳研究会編

これも昭和四十七年一月から五月まで北日本新聞に「越中の山」と題し連載されたものをまとめたものである。

ここに収められているのは、富山県内にある七〇〇メートル以上の山で、北アルプスの主稜線上にあるものを除き一二三のピークで、五万分の一図に山名の記入がなくても、地元での呼び名がわかるものはあげられている。執筆者は富山県内の小・中・高校の山好きな教師たちで、忘れられている山のよさを紹介した意味でも興味深い。

昭和四十八年八月北日本新聞社発行三三一ページ、定価八五〇円

（山崎安治）

会務報告

十月理事会

（十月五日本会ルーム）

▽出席者　中屋、織内副会長、板倉、近藤、春田、宮下、神崎、須田、山本、丹部、田村、帰山各理事。望月、山崎各評議員。

▽報告事項

・上高地山岳研究所開所式の件（伊倉）

十月八日、山研において上高地付近の関係者諸氏を招き開所式をおこなう。本会より三田前会長、中屋副会長、山崎評議員ほか出席の予定。

・年次晩餐会の件（板倉）

年次晩餐会は十二月一日、ホテルニュージャパンにて開催。会費三五〇〇円。

・会報遅延の件（春田）

やむをえざる事情のため発行がおくれて申訳ない。この対策については緊急常務理事会をひらき検討したい。この件、了承。

・高所登山研究会（宮下）

九月二十三日、上高地山研において第一回の会合をひらいた。

・集会委員会（神崎）

十月の現地小集会は、二十二、三日箱根湖尻キャンプ場にて行う。会員にたいするアンケート回答は二三九名、その集計報告と分析が報告された。

・図書委員会（近藤・山本）

第六回図書交換会は十月十三日に開催。年次晩餐会のときおこなわれる「この一本展」は、通例の展示とともに、松方三郎名誉会員追悼展を計画中。「近代登山の先駆者たち」展（烏水・理太郎・金次郎生誕百年記念）は十二月二十三日の開会を目標に着々と準備中。

・海外連絡委員会より（丹部）

ネパール大使歓送会およびネパールの担当官の更迭報告。ソヴェトにおけるVIAA大会に、現地より田村委員、本会より鈴木委員を派遣。この件了承。

▽議事

・松方三郎名誉会員追悼会（板倉）

松方氏追悼会は、昭和四十九年度総会（四月予定）ののち、OAG会館ホールにて開催したい。承認。

十一月理事会

（十一月二日午後六時本会ルーム）

▽出席者　中屋副会長、織内副会長伊倉、板倉、春田、宮下、原、近藤、須田、神崎各理事、望月、金坂山崎各評議員

▽報告事項

・名誉会員・顧問の件（山崎）

三田幸夫、辻壮一、早川種三、加納一郎、四氏名誉会員、高山忠四朗氏、顧問に可決、年次晩餐会にて発表及び報告する。

・会報の件（山崎）

遅れていた九月十月号会報「山」が発刊された。

・書評委員会の件（山崎）

多忙のため春田氏より山本良三氏が引継いで委員会の運営に当る。尚、更に充実を計り近藤信行氏望月達夫氏がスイセンされた。

・松方氏事後報告（板倉）

埋骨には藤井運平氏宮下秀樹氏が参加した。山岳会関係の御香料三十八万二千円を中尾副会長、板倉常務理事から松方家に納めた。

・自然保護の件（板倉）

インドからモディ氏が来日自然保護運動を世界的にする提案がなされた。

・高所登山研究会の件（原）

九月二十二日（土）～二十三日（日）上高地山岳研究所にて高所登山研究会が開かれ出席者は次の通り。

金坂一郎、原真、宮下秀樹、塚本珪一、加藤幸彦、浅見正夫、阿部和行、松本竜雄、神崎忠男委員他七名。

・山岳研究所の件（伊倉）

上高地の交通が十一月十日で運休となるので十一月二日伊倉氏が冬期のため入所冬準備を完了（冬期閉鎖）

電気工事は今年中に完成が間に合ず関係書類を関係官庁に提出して来年に備えた。尚、山岳研究所の状況を会報などで報告して募金してくれた会員に通達する意見が出た。

・集会委員報告（神崎）

第三〇〇回現地小集会が箱根湖尻キャンプ場で四十四名の出席者で行なわれたが二十一日は雨でハイキングが出来なかったが楽しくキャンプファイヤーの親睦会の思い出を残して散会。

・海外連絡委員会報告（丹部）

中国の体育の関係者が体協の招きで来日、山岳関係も交渉を依頼、中国では新組織結成中である。日本の山に登りに来て下さいと伝達した。

また、イラン山岳協会々長来室、日本から登山に来る要請があった。

VIAAソ連大会に参加した。鈴木郭之氏帰国、来年はユーゴーで開催。

・図書委員会報告（近藤）

十月十三日　山岳図書交換会開催盛会に終る。

烏水記念号（山岳四十四年一号）復刻版作製、一冊二〇〇〇円で配本予定

烏水記念展を十二月二十三日から二十九日迄丸善にて開催、着々準備中。

・山岳進行状況の件（近藤）

三月発刊を目ざして頑張り中。

・学生部マラソン大会の件（宮下）

十一月十日（日）午前十時より皇居前広場にてマラソン大会開催、個人戦皇居一周団体戦四人一組四周。

・学生部ヒマチャル・プラディシュ遠征隊より寄贈品の件（伊倉）

十月二十九日学生部登山隊帰国、本会に装備の寄贈あり。

・登山用具安全検定の件（宮下・金坂）

通産省に製品安全法が作成され登山用品の一部について法律に取りあげるべきかどうかという諮問をうけているその委員に本会から宮下理事を派遣した。委員長は篠田軍治、金坂一郎両氏が二部門に担当ということが理事会に報告されたが審議が始まったばかりである簡単に結論を出すことはむずかしい現状である。

▽議題

エベレスト女子登山隊の件

依頼書、念書を添えてエベレスト女子登山隊の後援依頼あり後援はマナスル女子登山隊と同じく可決された。

図書室便り

（昭和48・9）

新刊図書受入報告

読売新聞社寄贈

(1)今田重太郎著『穂高に生きる』　昭和48

日本山岳会

(2)日本山岳会編『山岳—第2年第3号』〔覆刻版〕昭和48

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕

(1)山村民俗の会『あしなか』No. 138

武田久吉先生追悼（48-8）

(2)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 76・77（48-9・10）

(3)いこいの山岳会『月報』No. 145（48-9）

(4)日本地図資料協会『古地図研究』No. 43（48-9）

(5)国立公園協会『国立公園』No. 285, 286（48-8, 9）

(6)京都山岳会『京都山岳』No. 581（48-9）

(7)東京営林局広報室『みどり』No. 13（48-9）

(8)奥多摩山岳会『O・M・C・レポート』No. 286（48-9）

(9)日本自然保護協会『自然保護』No. 134 135（48-7, 8）

(10)低い山を歩く会『低山』No. 99（48-9）

(11)日本登山協会『山と雪』No. 184（48-9）

〔雑誌〕

(1)『アルプ』

(2)『岳人』No. 316（48-10）

(3)『岩と雪』No. 33（48-Autumn）

(4)『山と渓谷』No. 421（48-10）

(5)『創文』No. 120・121・122（48-7. 8. 9）

〔その他〕

(1)日本ネパール協会『会報』No. 8 '73-8

(2)滋賀県山岳連盟・滋賀岳連第二次ヒマラヤ登山隊『バンジャブヒマラヤ登山隊報告書'72』

(3)京都大学学士山岳会『ヤルン・カン遠征隊報告書'73』

(4)大阪市立大学山岳会第三次ヒマラヤ遠征隊『カンジロバ・ヒマール初登頂'70ポストモンスーン』

隊長常慶和久『ヒマラヤ紀行カンジロバ・ヒマール初登頂』

〔新着海外雑誌〕

1. "Alpinismus" '73-8
2. "The American Alpine Journal" Vol.18, No. 2 '73
2. "Deutscheler Alpenverrein" 25 Jahag, Heft 4 '73
4. "The Himalayan Journal" Vol. 31 '73
5. "Mazama" Vol. 53, No. 13 '72
6. "La Montagne et Alpinisme" 99 annee, No. 92 '73
7. "Mountain" No. 28, July, '73
8. "Panorama of Slovakia" '73-2
9. "Rivista Mensile" Anno 94, N. 5, Maggio '73
10. "Trofeo Mezzalama" '71
11. "U.I.A.A." Bulletin No. 54 '73
12. "U.I.A.A. Climbing Classification System" '73

〔その他〕

1. "International Civil Defence Bulletin" No. 213, 214, 215, 216
2. "World Directory of Environmental Organizations Sierra Club"
3. 韓国山岳会『会報』No. 15 ('73-7)

ルーム日誌（48年9月）

3日（月）集会委員会

6日（木）山岳編集委員会
10日（月）烏水・理太郎・金次郎展委員会
13日（木）図書委員会
14日（金）青年懇談会
18日（火）理事会
20日（木）第二九九回小集会
「中央大学アピ遠征報告」
市川　邦治氏
「エベレスト会議報告」
丹部　節雄氏
25日（火）書評委員会
26日（水）学生部委員会
烏水・理太郎・金次郎展委員会
27日（木）婦人懇談会
「アフリカのお話と8ミリの会」
津田　周二氏
28日（金）青年懇談会
九月中来室者　四三三名

会員異動

退会会員（48年9月）
一八八〇　井上　綱
七二八〇　市原　勝枝

物故会員
七六〇五　若山　美子　昭和四八・八・三逝去
五四七　松方　三郎　昭和四八・九・一五逝去

訂正　会報三三八号会務報告（一〇頁）除籍者氏名欄中五八四七稲田房子とあるを取消します。

第六回山岳図書交換会報告

会員の愛書家仲間が集まり、会員相互の図書交換を目的とする恒例の図書交換会が、今回は第六回をむかえた。年一回のこの催しを待ちかねている会員も多く、十月十三日（土）の午後、ルームは約六十名の参会者でにぎわった。今回は昨年より出品点数がやや少なかったが、会員諸氏の協力により和書・洋書・雑誌など約一七〇点が集った。

二時から展示、三時半から図書委員の野上成勇氏の進行によって抽選がおこなわれた。今回の抽選方法は例年と異なり、各自が希望図書番号と自分の名前を書き入れた投票用紙を集め、希望図書毎に集めた投票用紙の中から一枚を図書委員の武田満子嬢、山本良三氏がとり出し、当選者の名前を読み上げるという方法がとられた。名前を呼ばれて喜ぶ人、はずれてがっかりする人やら、抽選が終るまでルームの中は興奮がうずまいていた。なかでも人気のあったものをあげると、JAC東海支部「遥かなる未踏の尾根」に十六人西岡一雄「泉を聴く」と山田圭一「白き聖地」（私家版）に各十一人、串田孫一「霧と星の歌」に九人、バウァー「カンチェンジュンガをめざして」（田辺主計・望月達夫訳）、早大探検部「EL ECUADOR」、山岳四十三年一号」に各七人の申込みがあった。そのほか希望の多かったものとしては、Hillary: High Adventure・深田久弥「ヒマラヤの高峰第一巻」や、Alpine Journal 1972 などであった。最後に岡田幸雄氏出品の大島亮吉「山研究と随想」は最低価格八千円ということで入札がおこなわれ、競争者なしで笠原正明氏が一万一千円で獲得し、今回の目玉品である神原忠夫氏出品の木暮理太郎「山の憶ひ出、上下」（竜星閣初版本、毛筆署名入）は最低価格一万円ということで入札がおこなわれ、六人の希望者があらそった結果、黒田正雄氏が二万一千円で獲得した。今回出品された中には辻村伊助「ハイランド」（梓版）、小島烏水「日本アルプス、第一巻、二巻、三巻「偃松の勾ひ」などの目玉品があり、珍らしいものとしては、Conway 卿直筆手紙付の Climbing in the Himalayas があった。

本を読むよりも山へ行く方が先だと考えているような学生部の若い人達がくじに当って喜んでいたのが印象的だった。

この催しは明年も十月中旬におこなう予定なので、大いにご利用いただきたい。当日の売上総額は十七万五千六百九十円、その五分をルーム運営資金に、五分を図書基金にさせていただいた。岡田幸雄氏出品の辻村伊助「スウィス日記」（横山版）、島田巽氏出品の松方三郎「アルプスと人」、林清氏出品「佐伯宗作遭難の真相」（複刻版）、田辺主計氏出品の「学鐙一九三六年六月号」（山岳文献特輯）はルームの図書として買上げた。出品された会員各位には厚くお礼申し上げます。

（高遠　宏）

主要出品目録

（円）

丹沢山塊（塚本閣治）　五〇
日本アルプス　第一巻、二巻、三巻（小島烏水）六〇〇〇
泉を聴く（西岡一雄）　一五〇〇
青葉の旅落葉の旅（田辺重治）五〇〇
旅路（田辺重治）　五〇〇
日本南アルプスと自然界（流石英治他）　二〇〇
詩人の風土（尾崎喜八）　二五〇
富士山の自然界（山梨県）　二〇〇
山路の旅（田辺重治）　三〇〇
山への思慕（田辺重治）　四〇〇
若き日の山（串田孫一）　一〇〇
山（辻村太郎）　二〇〇
針葉樹（岩波写真文庫）　五〇
わたしの山旅（槇有恒）　一〇〇
単独登攀（瓜生卓造）　一〇〇
ある人間記録・山恋い（山本俊）五〇
探検と冒険　第一巻　第八巻（朝日新聞社）各三〇〇
ネパール王国探検記（川喜田二郎）五〇〇
剱の窓（山崎安治）　五〇〇
マナスル登頂記（槇有恒）　五〇〇
第三の眼（今井幸彦訳）　三〇〇
山に憑かれた男（加藤喜一郎）四〇〇
秘境ヒマラヤ（大森栄）　二〇〇
岳（川崎隆章）　五〇〇
カンチェンジュンガをめざして（バウアー、田辺・望月訳）　一〇〇〇
白嶺コルデブランカ（近藤等訳）五〇〇
ワルデルンク（ヘッセ、尾崎訳）三〇〇
山　研究と随想（大島亮吉）　入札価一一〇〇〇
ハイランド（辻村伊助）　七〇〇〇
スキーの山旅（田辺重治）　一五〇〇
そこに山があるから（吉沢一郎訳）　四〇〇
アルプス　山と人と文学（近藤等訳）　五〇〇
自然の心（佐藤達夫）　四五〇
エヴェレストをめざして（ロント、松方訳）　三五〇
私の博物誌（市河三喜）　三五〇
野外にて（ジェフリズ、板倉訳）三〇〇
山日記昭四二（日本山岳会）　五〇
未踏の山河（シプトン自伝）一三〇〇
ブータン感傷旅行（小方全弘）三〇〇
そこに山がある（今西錦司）　四〇〇
ヒマラヤの高峰　第一巻（深田久弥）　三〇〇〇
遥かなる未踏の尾根（JAC東海支部）　三〇〇〇
アフガン記（近藤正造）　八〇〇
ゴリラ（今西錦司）　五〇〇
生と死の間（セイヤー、山崎訳）三〇〇
エヴェレスト登攀史（モラン、中田訳）　三〇〇
天山紀行（セミョノフ、樹下訳）三〇〇
秘められたる山旅（エーデルンク）　二〇〇
枕頭山水（幸田露伴）　二二〇〇
山の讃歌（岡田喜秋）　一〇〇
日本図会全集（日光山志、日本名山図会）　一〇〇〇
世界の山々（山と溪谷社）　二〇〇
スキー入門（瓜生卓造）　五〇
現代登山全集、槍・穂高・上高地　三〇〇
放浪漫記（大谷光瑞）　一〇〇〇
紀行文集（博文館）　五〇〇
霧と星の歌（串田孫一）　二〇〇
山登り（日本山岳会編）　五〇
越後の旦那様（日本山岳会）　八〇〇
ヒマラヤ聖者の生活探究（スポルディング、仲里訳）　一五〇
氷壁のシュプール（植木毅）　二〇〇
白き聖地（山田圭一）　五〇〇
続野草のたのしみ（八代田貫一郎）　二〇〇
山の憶ひ出　上下（木暮理太郎）　入札価二一〇〇〇
アルプスの民話（山田野理夫）一〇〇
世界の山々（山と溪谷社）　二〇〇
ヨーロッパアルプス（山と溪谷社）　二〇〇
九州の山地図付（立石敏雄）　一五〇
ある偃松の独日（中村清太郎）五〇〇
偃松の勾ひ（小島烏水）　二〇〇〇
旅日記（露伴ほか）　五〇〇
EL ECUADOR（早大探検部）　八〇〇
山想V・VI（法政大学山岳部）一三〇〇
登山二〇年史（八幡製鉄山岳部）三〇〇
山岳　二十三年二号　二〇〇〇
山岳　四十三年一号　一五〇〇
山岳　四十五年、四十九年各二〇〇〇
山岳　四十六（七）年　二五〇〇
山岳　五十年　三〇〇〇
山岳　五十一年　一五〇〇
山岳　五十二年より五十九年まで　各二〇〇〇
山岳　六十年より六十六年まで　各一五〇〇
アルピニズム　一揃九冊　二〇〇〇
（その他の雑誌類は省略）
Young: On High Hills　2500
Raeburn: Mountaineering Art 500

Berge der Welt 1966/67 1000
Conway: Climbing in the Himalayas, with autograph letter 14000
Black: Peaks & Valleys 1500
Maraini: Where Four Worlds Meet 2000
R.G.S.: Supplementary Papers 800
Kaulback: Tibetan Trek 500
Younghusband: Relief of Chitral 3000
Fleming: News from Tartary 1800
Himalayan Journal '70 1300
Alpine Journal '72 1500
Ruttledge: Everest 1933 2000
Stephen: The Playground of Europe 1000
Tichy: Himalaya 2500
Kurz: The Mountain world 1954 2000
Hillary: High Adventure 1500
Ervine: Mountain 200
Younghusband: The Epic of Mount Everest 200

出品者　岡田幸雄、丹部節雄、山崎安治、望月達夫、田辺主計、雁部貞夫、笠原正明、杉本忠夫、赤星平馬、近藤信行、神原忠夫、木村俊郎、篠繁市、浦野勇逸、松家晋、橋爪幸達、初見一夫、林清、松崎中正、島田巽、足立源一郎（遺族）

山日記編集委員会よりのお願い!!
贈り物に
『山日記』のご利用を……

クリスマスや年末・年始のプレゼント用、あるいは進学・入学・就職等のお祝い贈答品として「山日記」は価格も手頃です。とくに若人たちに喜ばれると思います。会員各位のご利用をお願いいたします。

山日記'74年度版案内

昭和五年に誕生した山日記は、戦時中一時成長がとまったこともありますが、年々新しい命を吹き込まれて、来年で三十九才になります。相も変らない一張羅の赤い表紙の衣を着ているので、時々中身も毎年変化ないのではないかと思われたりしていますが、来年もまた新しい命を吹き込もうということで、今年は正月と三月に、山日記愛読者の会というのをもって、広く意見を伺いました。その会の内容については、すでに会報に記しました。今回はそういう皆様の智恵を拝借した上で、今まで準備をしてきました来年度版の内容について簡単に記してみました。

山日記は当初から愛用してもらう頁と、愛読というよりむしろ利用してもらう頁との二本立てでできているものです。その点は発刊以来変らぬ姿勢できていると思いますが、その二本立ての基本姿勢のなかにも、山登りという行為の広い裾野を逍遥して、目を山の上の方ばかりでなく、右にも左にも、後にも向ける余裕のある頁があることが山日記の特色であると思います。慌しい気忙しい時代に、山登りものっかったような感じがありますので、一層立ち止って振り返ったり、右左を眺める余裕をもちたい。来年度もそういう意味でいろいろの献立てを考えてみました。例えば山の上の方を見る頁には世界の山—未踏峰があり、後の方をふりかえる頁には、装備—その変遷—・山の小事典—登山史—があります。右・左をキョロキョロする頁に、山の唄—ネパール民謡、スコットランド民謡があります。以下目次を追って記すことにいたします。

●口絵　グリーンランドの犬橇旅行
会報に、手紙が掲載されていましたが植村直己氏が、極北の地グリーンランドの海氷上を、真冬に単独で往復三千Kmの犬橇旅行を敢行した時に撮影したもの。十mの鞭を、一日五〇〇回、うちふる猛訓練で、どうにか橇を曳くようになった犬どもと橇と撮影者でもある植村氏自身が、氷山の前に被写体となっている。六〇年前、同じグリーンランドから出発したペァリーの北極点征服の模様を想像させてくれます。

●日記欄　予定欄　従来は毎年そのスタイルを変えていました。これは利用する人にとっては不都合であると考え決定版を研究しようということで、昨年は日付入りの日記欄を工夫してみました（日常用にも利用して欲しいという意図もありましたが）。これは結果として、多くの人が、愛読者カードで使いにくいという意見を述べ、自由日記形式のものがよいという意見でしたそれで、今年は自由日記形式のものに改めました。

●天気図欄等　天気図欄は、よく小さすぎて役に立たないではないかという意見がありますが、これはあくまで天気図用紙に代るものということではなく、予備的なもので、気象通報を聞きながら、眼で天気図欄を追って、あるいはメモをとって、天気予報に役立ててもらいたいという意味で作った頁です。

次に記事欄——

●装備—その変遷—　戦前の装備（金山淳二、戦後の装備（野村哲也）、テント・ツェルトザック（平林克敏）、山靴・ルックザック（佐藤久一朗）、三ッ道具・ザイル（海野治良）、装備表

今や、登攀不可能な壁はなくなった

とか、ヒマラヤ鉄の時代などといわれる時代になっていますが、そこには新しい装備の登場が大いにあずかっている筈です。そこで眼を後に向けて、では明治の末に我が国に近代登山が始って以来探検時代といわれる時代から今日のヒマラヤ鉄の時代まで登山史の裏にある装備の変遷とはどのようなものであったのかということに照明を当てて書いていただきました。

●**山の医療**（景山孝正）

●**遭難対策**（寺前紀夫）

●**登山のためのトレーニング**（松本竜雄）一人でも、日常的にできる山登りのためのトレーニングについて、また図入りで説明していただきました。

●**世界の山—未踏の山**—（吉沢一郎）未踏の山の第二回目で、本年がアッサム・ブータン・ネパールヒマラヤについて、来年度は、ガルワール（ウッタル・プラディシュ）パンジャブ・ヒマラヤ（ヒマチャル・プラディシュ）カラコルム地域の未踏峰について、記していただきました。

●**山の小事典—登山史**— 日本の登山史（山崎安治）ヨーロッパアルプス登山史（宮下啓三）登山史のなかから大項目と小項目の中間程度の項目を選んで、いわゆる登山史のさわりの部分を記し、併せて全体で登山史の概説にもなるような小事典です。この小事典は分野をかえて継続してゆきたいと考えています。

●**山の唄** ネパール民謡（山形洋一）スコットランド民謡（中村為治）山形氏が一年間ネパールに滞在している間に録音してきたもののなかから、三曲選んでもらいました。少し憂愁を帯びた感じの節に、短い文句がついて、日本のダンチョネ節や安曇節のようにあちこちの文句を入れて唱える覚え易いものです。スコットランド民謡は、十七世紀の優雅な格調の高い節には、バルンズの詞がついたものです。

次に**登山案内**

・山小屋一覧
・登山行程表
・五万分図幅一覧
・日本の山・日本の峠
・登山規制条例（剣岳・谷川岳）
・夏山臨時電報・電話取扱所一覧
・山岳保険について
・日本山岳会について
・日本山岳会支部一覧

見返し、裏表紙に

フィート・メートル換算表、度量衡換算表、七曜表（森下博三）、日出・日入時刻表（森下博三）、山の高、水の沸点と気圧の関係、おもな郵便料金表、NHK全国支局所在地ならびに周波数、ラジオ・テレビの気象通報・天気予報放送時間表

上高地山岳研究所建築基金
応募者氏名（昭47・7—47・12）
〔単位千円、百円以下切捨〕

名須川 浩5、守田治夫5、国枝武喜3、早川義郎5、木村俊郎3、藤井運平20、沼倉寛二郎10、佐藤浩幸10、葛谷凱治10、松田久男3、坂本 幹5、小池恭弘5、川端信治5、山田哲郎3、グリフィスウェイ10、野田三郎5、小田部 学3、九州歯科大学山岳会3、横山厚夫7、大森久雄10、今村正二3、藤田佳宏30、田原善治3、北村斎二3、種村重明3、西野喜与衛5、三菱商事山岳同行会5、坂井 厚3、井上みち子3、坂倉登喜子20、山路岳夫10、青木一夫5、田辺恵造10、平野 明5、井上 博5、藤野沢裕5、木村能彰5、田口憲司3、島根康郎5、井口正男5、松島静吾3、後藤幹次10、松永敏郎10、藤島敏男15、槇 有恒10、山下久男3、小林智明10、松田雄一10、又木周夫10、岸田権二10、柴田厳太郎10、小倉薫子5、小倉茂暉5、折井健一10、黒石慎3、神保信雄3、森田 茂5、上条清明3、西郷正郎5、金子泰助3、石上隆章10、長沼真澄5、川越智津子5、吉村健児5、高橋俊紀3、樋口明生10、岡本竜行3、佐藤佳年3、渡辺節子3、二木信次10、木下是雄5、高木泰夫2.5、杉並区役所山岳部5、松本善二10、岡村治信3、松本熊次郎20、小原勝郎10、中島 寛10、三田幸夫30、望月達夫30、名児耶達男3、斎藤平七3、金山淳二5、吉田久兵衛10、内藤成泰100、林和夫50、木村勝久10、片山英一10、泰磨 徹5、平野 明5、京都山岳会5、大野俊夫10、百瀬一茂5、橋本源之丞3、今木良彦5、相原軍一10、山本光二3、吉田 薫5、神原忠夫3、川北仁3、田口二郎10、伊達篤郎10、牧野四子吉5、牧野文子5、増田洋子5、池田光二5、平山武志10、百瀬舜太郎13、山里寿男5、永井清一20、田村扇一10、柳 宏子5、宇田川久太郎3、中野征紀10、秋山宏明3、神谷博行10、成瀬岩雄10、津田周二20、丹部節雄10、大森薫雄10、島田 巽10、鷲尾彦七郎5、神保信雄3、内田耕作3、小野利次5、森川洋佑10、田中 薫20、清水悟郎5、大島秀夫3、鳥居 亮5、塚本茂樹10、山口節子10、板倉勝正10、織内信彦10、池元善秋5、小方全弘10、高田真哉10、木村哲夫3、野崎茂樹3、福田守美5、奥村清明3、中村賢二3

昭和四十八年十二月十日発行
東京都文京区湯島一—六—一
利根川商事㈱さくらビル
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎安治
(813)二二八六(代表)
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

“ヒマラヤ山岳の旅18日間”

問い合せ先
三井航空サービス株式会社
旅客部団体課
東京都港区新橋1—18—1
電話（504）0271（大代表）

期　間：昭和49年3月10日～3月27日

費　用：¥358,000（ローン可）

定　員：15名

御案内人：エベレストビューホテル社長
宮原　巍氏

安全対策：医師並びに参加者の皆様の安全を図るために、現地人医師を第9日目より15日目までエベレストビューホテルに滞在せしめると共に、酸素ボンベの用意も致しております。

日　程：

第1日目　東　京✈ニューデリー
第2日目　ニューデリー✈カトマンズ
第3日目　カトマンズ滞在
第4日目　カトマンズ✈ポカラ
第5日目　ポカラ滞在
第6日目　ポカラ✈カトマンズ
第7日目　カトマンズ滞在
第8日目　カトマンズ✈ルクラ：徒歩にてモンジョへ（モンジョテント泊）
第9日目　モンジョ⟶ナムチェバザール
第10日目　ナムチェバザールより徒歩にてエベレストビューホテルへ
第11日目　エベレストビューホテル滞在
第12日目　エベレストビューホテルよりタンボチェへトレッキング（タンボチェ泊）
第13日目　タンボチェよりエベレストビューホテルへ
第14日目　エベレストビューホテル滞在
第15日目　エベレストビューホテル⟶カトマンズ
第16日目　カトマンズ滞在
第17日目　カトマンズ✈カルカッタ
第18日目　カルカッタ✈東　京

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行
小方全弘著
〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河
加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話
初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山
望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に
大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山
川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと
坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

遙かなる未踏の尾根
マカルー1970年
日本山岳会東海支部
〈B5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

山日記1973年版
日本山岳会編
〈A6判344頁〉定価850円

山　岳
日本山岳会編
〈A5判〉
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
総索引 1,000円

国立公園カレンダー
国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然
赤星　昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集
戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

いろりばた
南会津山の会
〈B24どり判320頁〉定価1,900円

シプトンの自叙伝
未踏の山河
大賀二郎・倉知敬訳
〈A5判440頁〉定価1,900円

日高山脈
北大山の会編
〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ
藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

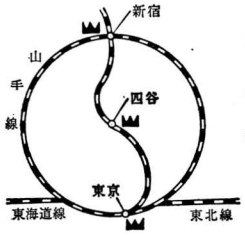
日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進編
〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店
好日山荘
東京店・中央区銀座2－4－5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2－4－4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4 (28) 3440